

留学先決定に至るまでの経緯

Funai Overseas Scholarship 第1回報告書

2015年度 FOS 奨学生 福井真夫

1 経済学者を目指すまで

物心ついた時から研究者が僕の憧れだった。誰に命令されるでもなく、自分なりの問題意識を自由に追究していきたいという思いがあった。両親が研究者だったことも大きく影響していたと思う。

高校生の頃は物理学者になりたいと思い、進路選択では理系を選んだ。いくつかの簡単な法則が複雑な世界を体系的に説明していく物理学を学ぶのは、とても清々しかった。しかし、高校2年生の頃に当時ベストセラーになっていた『ヤバい経済学』を何かの拍子に読んだ時には、物理学を学んでいる時と同じような清々しさを覚えた。そこからは経済学の一般書を読み漁り、経済学は分析対象が自然界から人間社会に置き換わった物理学だという思いを強め、それに魅了されていった。何より僕の気持ちを駆り立てたのは、経済学はまだ出来て100年程度の比較的新しい学問だということだった。自分がニュートンやアインシュタインのような何かになれるかもしれないという野望が、当時の心の奥底にはあったのかもしれない。高校3年生になる頃には文転を決めた。

2 留学を意識してから

いったん経済学者を目指すとなると、留学という選択肢は（必要以上に）意識させられる。時折、自分は偉大な経済学者を目指しているのか、留学を目指しているのか見失いかけるぐらいだった。日本の経済学はアメリカに大きく遅れを取っており、過去に成功している日本人の多くがアメリカで学位を取得しているという経済学特有の事情が背景にはある。日本での修士を経て、アメリカ大学院のPh.D.に応募するというのが標準的なキャリアパスであり、どことなくそれが当たり前かのような空気感だった。僕もその例にもれず、そういった消極的な理由で、経済学部に進学した大学3年の頃から留学を意識し始めた。

それから3年たって修士2年になる頃、留学をするならばその準備に取り掛かるべき時期になった。3年間の経験で視野も広がり、以前のような「留学しなきゃいけない」というような強迫観念じみたものはなくなっていた。日本での生活は居心地がよかったし、何より指導教官には本当に恵まれていて、アメリカに行ったからと言って特段、研究環境が良くなるイメージは湧かなくなっていた。それでも、経済学の主戦場たるアメリカで切磋琢磨してみたい、という思いは捨てきれなかった。そこで、指導教官のオフィスを訪ねて率直なアドバイスを求めると「福井くんは留学したらいいんじゃない」と返ってきた。指導教官に背中を押してもらえたことは寂しくもあったが、どことなく認めてもらえた気がして嬉しかった。留学準備に取り掛かったのはその日からだった。

それからは修士論文を書く傍ら、至って平凡な準備を進めた。TOEFLは目標の点数が出るまで10回ほど受けたし、GREは数学セクションだけを念入りに準備して受けた。SOPは自分のこれまでの研究と問題意識が簡潔に伝わるように何度も書き直して、その度に英文校正に出した。外部奨学金への応募も行い、幸いにして船井情報科学財団から内定をもらえたことは出願の強みになったし、自信につながった。

3 出願と合格

結果、11校に出願して6校から合格の通知を受け取った。MITには全く受かるとっておらず、合格を受け取った時は喜びよりも驚きが先に来た。MITの経済学部は伝統的には日本人をあまり採らないことで有名だったからだ。

オファーをもらった6校のうち、4校をキャンパスビジット（留学先決定前に大学側が招待してくれる下見のようなもの）で回った。MITのビジット中、英語が出来なくてオロオロしている僕に、同じくビジット中のベトナム人が気さくに話しかけてくれた。彼とは気が合ったし、学問的な興味関心も近かった。“MIT is my dream school”と合格の喜びを包み隠さず興奮気味に話していたのが印象的だった。彼とクラスメイトになる未来を想像するのは楽しかった。最終的に僕が進学先をMITに決めた頃、彼は別の大学に進学するとFacebookを通して知った。後に聞くと、MITからは1-2年目の奨学金（授業料と生活費）が降りなかったらしく、金銭的な問題から諦めざるを得なかったようだ。寂しく思うと同時に、船井奨学金にサポートしてもらえらる事のありがたみを噛み締めた。

4 進学先の決定

「どの大学に行くかは君の成功には関係ないよ、結局は君次第なんだから」。キャンパスビジット中に面会を申し込んだある教授に言われた一言だった。「そんなこと、わかっていますよ」と言わんばかりの涼しい顔を取り繕ったつもりだったが、心の奥底には突き刺さった。それまで会った教授は口を揃えて「ぜひ、うちにおいでよ」と勧誘してくれていたし、そういうものだと思っていたからだ。すっかり舞い上がっていた僕の内心を見透かしての一言だったのかもしれない。それから大学選びで深く迷うことをやめた気がする。結局、どうせ挑戦するならすごい奴らが集まる方がいいと思ってMITに決めた。

威勢よく進学先を決めた時とは裏腹に、今となっては自信と不安が半々ですが、それも含めてこれから始まる留學生活が楽しみです。お世話になった教授が、「社会学者たるもの、自分たちが知らない『社会』に触れることは必須だ」と留學を勧めてくれたことは印象的でした。研究面だけでなく、今までと全く異なる文化や友人に触れることによって、経済学者として成長できれば本望です。最後に、あらゆる面において多大なサポートをしてくださる船井情報科学財団の皆様、心より感謝申し上げます。